移民のカンツォーネ・ナポレターナ

近　藤　直　樹

解題

現在では，ランペドゥーサ島への不法入国のボートがニュースを賑わせ，移民受け入れ国として名高いイタリアだが，1970年代まではイタリアから国外への移民の数が上回る送り出し国として知られていた。とりわけ1880年から，アメリカ合衆国により一国当たりの移民の受け入れを制限する「ジョンソン＝リード法」が制定された1924年までの50年近くは，「大量移民」の時代と呼ばれている。当然ながら1861年の統一以前から，イタリアを後にして外国に新天地を求めた「イタリア人」は数多くいたが，当時のイタリアは小国が分立している状況であったこともあり，全国規模の公式の統計が残っていないだけに，その実態は正確さを欠く。イタリア王国が移民の統計を取り始めたのは1876年で，その後1925年までの統計調査によれば，50年間で1660万人を数える[1)]。

19世紀後半には，ロンバルディアやヴェネトなど北イタリアから，ブラジル，アルゼンチンをはじめとした中南米アメリカへの移民が多く，その様子はトリノを拠点とした作家エドモンド・デ・アミーチス Edmondo De Amicis（1846–1908）の『クオレ』*Cuore*や『洋上にて』*Sull'oceano*に詳しい。一方，19世紀末から20世紀にかけて，シチリア，カラブリア，カンパーニアといった南イタリアから，アメリカ合衆国，とりわけニューヨークへの移民が急増した。彼らはマンハッタン南部のロウアー・マンハッタンに住み着き，最大時で90％の住民がイタリア系移民という「リトル・イタリー」が誕生する。

イタリア移民の物語は，悲惨な三等客室の航海や到着後の搾取と差別，そして犯罪組織の存在から，暗い面ばかりが目立って取り上げられるが[2)]，彼らの生涯はただ劇的で悲壮であっただけではない。密集したイタリア人コミュニティーの存在は，本国のイタリア文化の維持にも益し，イタリア語の新聞やラジオ放送，イタリア語による劇の上演やコンサート，そして聖アントニオや聖ジェンナーロを祀った宗教行事も行われていた。本国と異なりながらも，可能な限りそれを保持しようという，独自の文化圏となっていたのだ。

とりわけ音楽はイタリア人の得意分野として認識されていて，1910年には，リトル・イタリーの狭い地域に，「カフェ・コンチェルト」が約40軒，コンサート会場が17軒立ち並び[3)]，イタリア語による音楽や演劇が上演されていた。中でもナポリを擁するカンパーニア州出身者が数多く居住していたマルベリー通りは，音楽と演劇の中心地で活況を呈した。イタリアの劇団や歌手たちの巡業が頻繁に行われたばかりか，テノール歌手エンリーコ・カルーソ Enrico Caruso（1873–

1921）やナポレターナの歌姫ジルダ・ミニョネッテ Gilda Mignonette（1886–1953）らは，郷里ナポリを離れアメリカに移住し後半生を送っている[4)]。

メトロポリタン歌劇場の大スターとなったカルーソに見るように，アメリカでも19世紀イタリアオペラの人気は高かったが，カンツォーネ・ナポレターナもそれに劣らぬ注目を浴びていた。カルーソがベルリナーのヴィクターと契約し初期の蓄音機用レコードに録音したレパートリーには，《サンタ・ルチア》*Santa Lucia*や《オ・ソーレ・ミオ》*'O sole mio*，そしてカルーソのために書き下ろされた《不実な心》*Core'ngrato*も含まれていて，カンツォーネ・ナポレターナおよび，ナポリを舞台にしたカンツォーネは21曲を数える[5)]。

実は，大量移民と呼ばれたこの時代は，カンツォーネ・ナポレターナがローカルな文化からグローバルな現象となった時期に重なっている。1880年から1924年は正しく，カンツォーネ・ナポレターナが，ナポリおよびその周辺の狭い地域の俗謡から，新聞や雑誌，レコード，演劇，映画を巻き込み，オペラにも匹敵する一大文化産業に発展していった時期なのだ。1880年には《フニクリ・フニクラ》*Funiculì Funiculà*が世界的にヒットし，それに目を付けた地元ナポリの新聞社が，若手の詩人や作曲家に楽曲を作成させ，９月７日夜のピエディグロッタ前夜祭は，本来の宗教行事から次第にカンツォーネ・ナポレターナの祭典に変質していく。そして1892年以降，ビデーリ社の雑誌『ターヴォラ・ロトンダ』*Tavola rotonda*でカンツォーネのコンクールが行われ，「ヒットチャート」という概念に近いものが誕生する。新聞・雑誌各社は競ってカンツォーネ特集号を刊行し，そこに北イタリアやドイツの出版社も参画する。こうして毎年6000曲を超える新曲が発表され，イタリア初の「ポピュラー音楽」となっていくのだが，その過程と同時に進行していたのが，南部からアメリカ合衆国への大量移民だったのだ。

こうした背景を受けて，1910年代から1920年代には，移民をテーマとしたナポレターナが大量に発表されている。それは，家族の一員を移民として送り出したナポリ人の心を動かし，そして望郷の念を抱え，イタリア人（ナポリ人）としてのアイデンティティを保持しようとする移民たちの涙を誘った。詩人や作曲家の中には移民も多く，そうしたイタリア系移民たちの作ったカンツォーネが，逆輸入される形で，本国ナポリで歌われヒットした例も少なくない。

ここでは，そうした移民をテーマに扱ったカンツォーネ・ナポレターナの中から９曲を選び，「出港」「郷愁」「帰郷」と，歌詞に書かれた状況にしたがって三つの項目に分類して訳出した。カンツォーネ・ナポレターナの詩は，サルヴァトーレ・ディ・ジャコモを頂点としてナポリを代表する詩人たちが手掛けているものが多く，文学的な評価の対象となるが，その一方で，ポピュラー音楽の「歌詞」でもあり，そこに描かれた移民の姿が，必ずしも現実を，美学的にであれ反映しているとは限らない。とりわけ1920年代から30年代にかけては，「シェネッジャータ」と呼ばれる大衆的な音楽劇がナポリで流行し，観客であるナポリの下層階級の嗜好に合わせて，必要以上に感情に訴えようとするカンツォーネが劇中歌やタイトル曲として作成された。だがそれもまた時代の表象であり，その時代の「移民」の表象で，重要な証言であることに変わりはない。いずれにせよ，カンツォーネ・ナポレターナが文化産業として最も成熟していたこの時期に，移

民をテーマとした楽曲が数多く作られ歌われたことは事実で，移民の歌を概観することで，カンツォーネ・ナポレターナの本質やそのエートスの一隅の理解にも繋がることは間違いないだろう。

歌詞は全て，ナポリ方言（ナポリ語）の原詩から翻訳した。テクストは，VivianiやBovioのような有名詩人の手による場合はそれぞれの詩集を使用したが，その他の詩については，カンツオーネ・ナポレターナのアンソロジーおよび，ナポリ文化のポータルサイト「Napoligrafia」を参考にした。《アメリカ帰り》*'O ritorno d'America* はそのいずれにも全文が掲載されていないため，当時発売された歌詞カードを使用した。

翻訳

１．出港

移民を扱ったカンツォーネ・ナポレターナの中でも最も量的に多いのが，ナポリの港を離れる悲痛な情景を歌ったものである。ここでは，《移民》*L'Emigrante*（1918），《遥かなるサンタ・ルチア》*Santa Lucia luntana*（1920），《移民のマンドリナータ》*Mandulinata'e ll'emigrante*（1923）の３曲を紹介する。

《移民》は，ナポリを代表する劇作家ラッファエーレ・ヴィヴィアーニ Raffaele Viviani（1888–1950）の初期の一幕劇『港』*Lo Scalo marittimo*（1918）の劇中歌として誕生した。ヴィヴィアーニは４歳で俳優としてデビューし，若いころは，ナポリの路上で目にする様々な特徴的な人物の形態模写を得意とし，ヴァラエティー・ショーで活躍した。1917年以降，劇団を結成し俳優として舞台に立ちながら自作の戯曲を発表していく。その多くが，劇中歌（作詞・作曲ともにヴィヴィアーニ自身の手による）をともなうある種の「音楽劇」で，また路上や広場など屋外が舞台とされていて，エドアルド・スカルペッタやエドゥアルド・デ・フィリッポといった，ほぼ同時代のナポリ演劇の代表的な劇作家の戯曲が室内を舞台としているのとは対照的である。

『港』は，ナポリのインマコラテッラ埠頭からアメリカへ出航するワシントン号に乗船する様々な人々を描いた喜劇で，《移民》を歌うのは，妻子を連れた農夫のコラントーニオである。ピエディグロッタ祭のために書き下ろされた楽曲がほとんどであった，いわば商業音楽の顔をもつカンツォーネ・ナポレターナの中にあって，リアリスティックで悲痛なヴィヴィアーニのカンツォーネはきわめて異質であるが，《スペイン地区のバンビネッラ》など，彼の劇中歌の多くがナポレターナのレパートリーに取り入れられ，現在も多くの歌手によって歌い継がれていて，両大戦間のカンツォーネ・ナポレターナの歴史は，ヴィヴィアーニを抜きにしては語れない。

移民を描いたナポレターナとしてはおそらく最も有名な曲が，E. A. マリオ E. A. Mario（1884–1961）作詞・作曲の《遥かなるサンタ・ルチア》である。E.A. マリオ（本名はジョヴァンニ・エルメーテ・ガエータ Giovanni Ermete Gaeta）は作詞および作曲の両方に秀でたナポレターナの申し子で，第一次世界大戦の激戦を描いた著名な軍歌《ピアーヴェの伝説》*La leggenda del Piave*（1918）など，イタリア語による創作でも知られている。《遥かなるサンタ・ルチア》は，

港周辺の「サンタ・ルチア」地区をナポリの象徴として使い（当然ながらそこには，19世紀の有名なナポレターナ《サンタ・ルチア》へのオマージュが込められている）その地を後にする悲痛な思いを歌っている。また「ひとたび月が懸かれば／ナポリを離れて／生きてはいけない」という箇所は，ディ・ジャコモのカンツォーネ《マレキアーレ》*A Marechiare*（「マレキアーレに月が懸かれば／魚たちも愛を交わす」）に言及していて，移民たちが月を見るたびに《マレキアーレ》の一節を口ずさみ，郷愁の念にかられるという，移民とカンツォーネ，旅立つ者と出発地の文化との壮大な関係までもが描きこまれている。

《移民のマンドリナータ》は，E. A.マリオの詞に，ジェンナーロ・チャラヴォーロ Gennaro Ciaravolo（1895–1984）が作曲をした一曲である。チャラヴォーロは独学でピアノと作曲を学び，無声映画やヴァラエティー・ショーで演奏をしながら，カンツォーネの作曲も手掛けていた。同曲は，船の中で聞こえたマンドリンによるナポレターナのメロディーに，離れたはずのナポリが近づいているような錯覚を抱いた移民の心情を歌っている。

移民[6]（1918）

そして，俺は家を捨て，国を捨てる，
そしてアメリカに行き，土を耕す。
一旗揚げるために旅立つも，このひと月は，
土を見ることもなく，空と海ばかり。

それで俺は家を捨てる，素敵なイタリアを
えらく遠いところ，異国に行くため。
こことは違う空と，違う星の下に
ガキどもと嫁さんを連れて。

あっちに着けば，憂鬱が始まる
生まれた田舎や，
あの年老いた素晴らしい母さんや
昔の懐かしいものすべてを思って。

いつか帰りくる日を，
夢に見て，俺は行く，
陽気に蒸気船に乗り込む
今日俺が発つのは，やむを得ずのこと。

そして，俺は家を捨て，国を捨てる。

遥かなるサンタ・ルチア[7]（1920）

船が出る，
遥か遠い国へと。
船内で歌うは[8]，
ナポリ人。
歌う間にも，
港はすでに消え，
月が，海に浮かび，
わずかにナポリを
見せてくれる。

サンタ・ルチア[9]，
君を離れ，
なんという憂愁。
世界中をめぐって
幸運を探し求めても，
ひとたび月が懸かれば[10]，
ナポリを離れて
生きてはいけない。

楽器を弾くも，その手は
震える，弦の上。
あふれる思い出，ああ
あふれる思い出。
心は癒されやしない
歌をもってしても。
声と音を聞くだけで，
涙があふれてくる，
帰りたい思いのあまり。

サンタ・ルチア，

君を離れ,
なんという憂愁。
世界中をめぐって
幸運を探し求めても,
ひとたび月が懸かれば,
ナポリを離れて
生きてはいけない。

サンタ・ルチア，君は
小さな港でしかないが,
けれども離れてみれば
あまりに麗しいその面影。
セイレーンの歌,
いまも網を引く。
心が求めるは，豊かさにあらず,
ナポリに生まれたのであれば,
ここで死にたいのだ。

サンタ・ルチア,
君を離れ,
なんという憂愁。
世界中をめぐって
幸運を探し求めても,
ひとたび月が懸かれば,
ナポリを離れて
生きてはいけない。

移民のマンドリナータ[11)]（1923年）

何マイルを超えてきたのか，この船は！
あまりに果てなく，誰も測ろうとしないが…
風が運ぶ甘いアルペッジョ
月が懸かるとカンツォーネに…

それは君，それは君[12)]，
マンドリンと
若さと，夢と，景勝の地…
君が近づいているのか，
寂しく遠いこの僕に，
カンツォーネが
君を歌いあげているこの時に！[13)]

押し黙った移民たち，
メロディーは心に染み入る。
歌は，数えきれないほど。
よき知らせを，風に乗せて。

それは君，それは君，
マンドリンと
若さと，夢と，景勝の地…
君が近づいているのか，
寂しく遠いこの僕に，
カンツォーネが
君を歌いあげているこの時に！

2．郷愁

郷里を離れて，もはやナポリ人（イタリア人）とはいえない移民は，目的地に着いた後でも，同化の過程を終えるまでは，いまだアメリカ人でもない。そうした曖昧なアイデンティティを抱え安住の地を持たない彼らにとって，海の向こうの郷里とそこに残してきた家族は，郷愁とともに思い出される。郷愁のカンツォーネはまた，アメリカの移民たちだけでなく，ナポリ（イタリア）に残り，移民を思う家族たちにも向けられている。郷愁の念に苦悶する移民の感情を想像し感情移入することで，残された家族は涙を流して劇的なカタルシスを行っているのだ。ここでは郷愁のナポレターナとして，《思い出のナポリ》*I' m' arricordo 'e Napule*（1920），《ナポリ人の涙》*Lacreme napuliane*（1925年），《ナポリからの絵葉書》*'A cartulina 'e Napule*,（1927年）の 3 曲を紹介する。

《思い出のナポリ》は，詩人・作曲家ともに，ニューヨークで活躍したナポリ出身の移民である。移民詩人パスクワーレ・エスポージト Pasquale Esposito（1887–1952）は，「パスクワロット」と呼ばれたガエターノ・エスポージトという移民詩人が同時代にいたため，P.L. エスポージトと署名していた。ジュゼッペ・ジョエ Giuseppe Gioè（1890–1957）は，アメリカでは「ジョ

セフ」Josephの名で知られた。カンツォーネだけでなくオペレッタの作曲も手掛け，両大戦間期にはニューヨークのイタリア人コミュニティーでよく知られた作曲家であった。《思い出のナポリ》は，移民詩人が書いたとは思えないほど当時の会話体のナポリ方言の特徴を残している。とりわけサビの箇所で，抒情的な回想を離れて，庶民の歌うセレナータを引用している箇所は興味深い。歌を回想するところから生まれた歌でもあり，回想のナポリの情景と歌の関係が見事に描かれている。自身が移民歌手であったエンリーコ・カルーソの晩年の録音によって有名となった。

《ナポリ人の涙》は，劇的なカンツォーネを得意としたリベロ・ボーヴィオ Libero Bovio（1883–1942）の真骨頂ともいうべき名曲で，今に至るまで多くの歌手がレパートリーとしている。作曲者のフランチェスコ・ブォンジョヴァンニ Francesco Buongiovanni（1872–1940）は，ナポレターナの音楽出版社サンタ・ルチアで編集長を務めた作曲家で，ボーヴィオの他にも，ディ・ジャコモやフェルディナンド・ルッソの詩にも曲をつけている。《ナポリ人の涙》は，クリスマスを前にして郷里の母親に宛てた移民の手紙の形式を取っている。詳細については語られていないが，おそらく妻は彼を裏切り，子供を捨てて家を出ていて，子供たちは祖母（手紙の宛先人）と暮らしている。アメリカで働く彼はナポリに帰りたいのだが，「故郷と，家と，名誉を失い」「ここに残って，働き続け」るしかないのだ。そんな彼にとって，孤独な中稼いだパンの味は苦い。劇的なこのカンツォーネは，当時，「シェネッジャータ」と呼ばれる音楽劇になり，1970年代にはマリオ・メロラ Mario Merola（1934–2006）によってリバイバルヒットし，1981年には映画にもなっている。

《ナポリからの絵葉書》は，ニューヨークの移民作家の手による楽曲で，やはりニューヨークで活躍した移民の歌手ジルダ・ミニョネッテの歌唱によって大ヒットした。詩人パスクワーレ・ブォンジョヴァンニ Pasquale Buongiovanni（1898–没年不明）は，移民先のニューヨークで様々な仕事をした後，イタリア語新聞「フォッリーア」紙を中心に多くの詩を発表した。ジュゼッペ・デ・ルーカ Giuseppe De Luca（1899–1960）も同様にニューヨークに渡ったナポリ人移民で，音楽の分野で活躍した。《ナポリからの絵葉書》は，手紙が郷里ナポリとアメリカをつなぐという意味では《ナポリ人の涙》に似ているが，そこには具体的な物語性はなく，絵葉書に写されたナポリの風景を見て郷里と母親を思う移民の率直な郷愁が描かれているだけだ。だが，その風景がいかにステレオタイプであろうと，いやステレオタイプであるためにそれだけ，移民の郷愁の念は激しく掻き立てられる。この曲を聴いた在アメリカのイタリア移民たちは，おそらく同じような経験を日常的にしていて，シンプルで激情的な歌詞に自らを投影していたのだろう。

思い出のナポリ[14)]（1920年）

思い出すのは，ナポリの朝，

少し少しと，明るんでいき，
甘い風と，爽やかな空気，
空に突き出る太陽は，炎のよう。
木々には鳥が歌い，
美しき娘さんたちにご挨拶，
シャツの袖をまくった少年の
天国の調べが聞こえた。

「薔薇よ，五月の薔薇，
恋人たちの薔薇，
このかぐわしい風のなか，
きみはまだ寝ているの？」[15)]

思い出すのは，ナポリの昼過ぎ，
思いを焦がす太陽，
恋人たちは，時を盗んで，
メルジェリーナであいびき。
そして遠景にはヴェズヴィオ，
海はゆるやかに打ちつけて，
岩礁が香り立つなか，
また違う物売りの声が聞こえた。

「あまりに美しい恋人がいれば
嫉妬に焦がれる，
鎧戸はいらんかね，
お役に立ちますよ」

思い出すのは，ナポリの夜，
波に揺られて，ポジッリポは眠り，
香しい風を放ち，
銀の外套を，月は広げる。
あの空を思い出すたび，
目には，涙があふれる，
連なる星々が目に浮かび，
あの歌の残響が聞こえる。

「歩み遅き舟よ，
僕はあの娘を思っている，
いまも恋しくて，
嫉妬に焦がれている」

ナポリ人の涙[16]（1925）

親愛なる母さん，
クリスマスも近づき，
離れていることが，一層つらくなってきます。
どれほど，花火に火を灯したいことか，
どれほど，ザンポーニャ[17]の音が聞きたいことか。

子供たちには，プレセーピオ[18]を飾ってやってください，
そして，テーブルには僕の皿も。
前夜には，お願いですから僕が
みんなとともにいるようにしてやってください。

どれほど涙を流させるのか，このアメリカは，
僕たちナポリの人間に。
ナポリの空を思い嘆く僕たちにとって，
なんと苦いのか，このパンは。

親愛なる母さん，
お金が，お金がどうだというのです？
故郷に焦がれる者にとっては，意味のないものです。
ドルならいくらか手元にあります，生活に
困窮したことなどありませんから。

毎夜，夢にみるのです，我が家を，
そして，子供たちの声が聞こえるのです，
けれども，あなたは夢のなか，マリア様のように，
十字架の息子を前に，胸に剣を刺されて[19]。

どれほど涙を流させるのか，このアメリカは，
僕たちナポリの人間に。
ナポリの空を思い嘆く僕たちにとって，
なんと苦いのか，このパンは。

前の手紙で知らせてくれたことでは，
アッスントゥレッラ[20]が，自分を捨てて
今も遠くにいる人の名を呼んでいるとか。
僕に何が言えるでしょうか？　子供たちが母親を求めているのなら，
呼び戻せばいいでしょう，「あの女」を。

いいえ，僕は，帰りません，ここに残って，
働き続けます，みんなのために。
故郷と，家と，名誉を失い，
死ぬまで酷使される。移民なのです，僕は。

どれほど涙を流させるのか，このアメリカは，
僕たちナポリの人間に。
ナポリの空を思い嘆く僕たちにとって，
なんと苦いのか，このパンは。

ナポリからの絵葉書[21]（1927）

今朝，届いた
ナポリの景色の
一枚の絵葉書，
母さんが送ってくれた…

ヴォメロ[22]が全て見わたせ，
メルジェッリーナ[23]が見える，
ナポリの空がわずかに…
この絵葉書の中。

ナポリよ，

この曲を書いた，お前のために，
そして，母さんのことを思って，
流したのだ，熱い涙を。

海も見える，
マレキアーロ[24]の。
手紙よりも多くを語る
このナポリの絵葉書。

このポジッリポは麗しい，
上品なこの屋敷…
素晴らしいは，ヴェズヴィオ山，
素晴らしい絵葉書。

ナポリよ，
この曲を書いた，お前のために，
そして，母さんのことを思って，
流したのだ，熱い涙を。

「幸せになれるものかい」
と母さんの言葉
「ナポリから，遠く離れて，
わたしから，遠く離れて」

そして数えきれぬ痛みに苦しむ，
心を，棘が引き裂く，
アメリカと比べてみれば
この絵葉書を。

ナポリよ，
この曲を書いた，お前のために，
そして，母さんのことを思って，
流したのだ，熱い涙を。

３．帰郷

ナポリへの帰郷は，移民たちの夢であり，移民を送り出しナポリで待つ家族たちの夢でもあった。ポピュラー音楽においては，そうした夢は現実を超えた表象となる力を秘めている。ここでは「帰郷」をテーマにした《アメリカ帰り》*'O ritorno d'America*（1903），《異国人のこころ》*Core furastiero*（1923），《太陽の国》*'O paese d' 'o sole*（1925）の三曲を紹介する。

《アメリカ帰り》の詩人ディオダート・デル・ガイツォ Diodato Del Gaizo（1868–1943）は，正規の教育を受けていない「民衆詩人」として知られていて，ヴィヴィアーニの《スペイン地区のバンメネッラ》の替え歌や，ジェンナーロ・オッタヴィアーノの作詞として知られている有名な《船乗り》（1893）の原詩を書いた詩人である。いわば，カンツォーネ・ナポレターナという巨大な文化産業の裏側にいて，輝かしい陽が当たることのないまま着想を与えていた存在として興味深い。アルベルト・モンターニャ Alberto Montagna（1871–1907）はピアニストにして指揮者で，多くの楽曲を作曲している。アメリカに出稼ぎに行って戻らない恋人サルヴァトーレを十年待ち続けるヴィチェンツァ，その二人の再会を対話形式で描いた同曲は，珍しくト書きが書き込まれていることからも分かるようにきわめて演劇的であり，詩人の多くが劇作家でもあったカンツォーネ・ナポレターナと演劇の豊かな関係を垣間見せてくれる。

《異国人のこころ》は，アルフレード・メリーナ Alfredo Melina（1873–1937）の詩に，E.Aマリオが曲をつけた名曲である。メリーナは20世紀初頭にアメリカに渡り，ニューヨークで活躍した移民の詩人・画家で，ナポリ移民の歌手テレーサ・デ・マティエンツォ Teresa De Matienzo と結婚し，ニューヨークで生涯を終えている。そんな彼が，ナポリに帰った移民を詩に描いているのは興味深い。長年をアメリカで過ごした移民がナポリに帰郷し，御者を雇って懐かしい街並みを再訪するも，御者は彼を「異国の旦那」と取り違える。ところが最後に彼は涙を流す。長年の外国暮らしで富を得てすっかり風貌は変わってしまったが，そのこころまでは異国に染まってはいなかったのだ。アメリカとナポリの間で揺れる移民のアイデンティティを立体的に描き出した歌詞はリアルにして秀逸で，移民詩人ならではの作品となっている。

《太陽の国》*'O paese d' 'o sole*は，ナポレターナの大詩人リベロ・ボーヴィオの詩に，ヴィンチェンツォ・ダンニーバレ Vincenzo D'Annibale（1894–1950）が曲をつけた有名曲である。ダンニーバレはナポリの伝統工芸でもある手袋製造会社を営みながら作曲をした兼業作曲家であった。《異国人のこころ》のような繊細な心理描写は見られず，移民の単純な「凱旋」が朗らかに描かれていて，ステレオタイプな感が否めない。だが，「郷愁」の項で紹介した《ナポリ人の涙》が，同年に同じ詩人によって書かれていることに注目しなければならない。帰るに帰れない移民の悲哀を描いた《ナポリ人の涙》と陽気な《太陽の国》は，移民というメダルの両面の表象であり，影のない《太陽の国》は移民の歌でありながら，同時にナポリ賛美の歌でもある。この曲の歌詞の一部は歌碑として，現在ナポリ中央駅構内に飾られている。

アメリカ帰り[25)]（1903）

女「ねえ，海よ，遠くへ行く海よ，
教えて，わたしのトゥリッロ[26)]はどうしているの？
ご覧，わたしはうろつき，涙を流し，揺れる，
この波のように…教えて，本当のことを。

お前[27)]はある日，あの人をアメリカに連れ去った，
お前は引き裂いた，この心を。
あの人を戻しておくれ，わたしが死ぬ前に。
お願いだから，やりきれないわ。

行き交う蒸気船，
帰る人はみな朗らか，
わたしのトーレひとりが，
帰って来ないの」

女「四月三十日は，はじめて
サルヴァトーレがこの心に傷をつけた日，
もう十年になる，わたしがいつも
この海岸に来ては，ため息をつくのも。

あの人の約束と口づけにも
心安らぐことはない。
この胸に縫いつけたあの人の肖像に，
書かれた言葉「けっして忘れない，きみを」

蒸気船が着いた，
アメリカからやって来た，
ああマリア様，贅沢な服は着ないと誓います，
トトーレが帰ってくるのなら」

男（港から出てきて）「麗しのナポリ，天国の地，
十年の後，ようやく帰ってきた。
俺のヴィチェンツァは今ごろ，

どこにいて，どれだけ苦しんでいることか」

女「ヴィチェンツァですって，そう言ったの？…そう，ヴィチェンツァよ
アメリカから来たのですか？」「ええそうですよ」
「お名前は？」「サルヴァトーレ」
（そこで彼女は胸のボタンをはずして，十年前に恋人にもらった
肖像画を引っ張り出し，相手を見つめながら言う）
「あの人だわ，そうよ」「お前か？」「ヴィチェンツァよ，トー」
（二人は抱き合って，喜びのあまり震えている）[28)]

男「ああ，かわいそうに，ヴィチェンツェッラ！
苦悶に震えているのか」
女「この手を広げて，あなたを待っていたわ」
男「泣かないで，俺は帰ってきたよ」

異国人の心[29)]（1923）

ナポリに降り立つ，このこころ
ご立派な旦那みたいに
ご立派な旦那みたいに。
何年もすごしてきた，アメリカで，
何年もすごしてきた，アメリカで。
今や誰か知ろう，このあわれなこころを。
今や誰であろう，この街に焦がれた
ただの異国人。

「旦那」と御者が言う
「旦那，曲がりましょうか」
そして喜ばし気に進む，御者とともに，
異国人になったこのこころ。

そして進むは，カラッチョロ通り[30)]，
照りつける太陽に輝く，
照りつける太陽に輝く。

閣下，これがポジリッポ，
閣下，これがポジッリポ。
けれども異国人は押し黙り，その言葉に
あれほど夢みた路地を
思い出している。

数え切れぬ恋人たちが，
夜更けまで歩く，夏の夜。
そして御者だけがひとり喋り，
異国人と取り違えている，このこころを。

それから夜も更けて，ナポリは
目を見張るばかり，
目を見張るばかり。
のぼるはヴォメロの丘，
のぼるはヴォメロの丘。
そこでこのこころは，こころになる。
「旦那，いかがですか，
この街の美しいこと。

旦那，泣いてらっしゃるんですか。
旦那，どうしちまったんですか」[31)]
御者にはわけが分からぬ，
泣いているのなら，こころは，異国人ではないのだ。

太陽の国[32)]（1925）

今日はひどく陽気で，
まるで今にも，泣き出したいほど，
幸せのあまり。
本当なのか，それとも夢か，
帰ってきたのか，ナポリに。
汽車が駅についたとたん，
聞こえてきた，マンドリンの音色。

ここは太陽の国,
ここは海の国,
ここでは，すべて言葉は
あまく，苦く，
いつでも愛の言葉。

この小さき家,
ポジッリポの丘の，小さき家,
遠くはなれて，手に入れられようか。
あたり一面，薄荷が匂いたつ
この貧しき家,
鮮やかに色づけたい。
ここから見える庭は，とこしえの花,
向かいには海が，ただただ海が。

ここは太陽の国,
ここは海の国,
ここでは，すべて言葉は
あまく，苦く，
いつでも愛の言葉。

すべては，すべては運命だった。
成功を求めることができようか，異国で,
ここで暮らしていきたいのなら。
冷やしてくれ，ワインを,
今宵は飲んでしまいたい,
酔っぱらってしまうほどに。
この家のなか，幸せをかみしめる,
母さんはそばにいて，あの子は歌ってくれる。

ここは太陽の国,
ここは海の国,
ここでは，すべて言葉は
あまく，苦く，
いつでも愛の言葉。

注

1）北村（2017），p. 2.
2）ニューヨークのイタリア移民の最下層の暮らしぶりは，ジェイコブ・リースの『向こう半分の人々の暮らし』に詳しい。リース（2018），pp. 65–71.
3）Frasca (2010), p. 6.
4）カルーソは帰郷中，ソレントでこの世を去っている。ミニョネッテは生前何度もナポリに帰ることを夢見ていたが，ようやく乗り込んだ船の中で命を落としている。cf. Sciotti (2007), pp. 151–155.
5）カルーソが録音したカンツォーネ・ナポレターナ（ナポリを舞台にしてアメリカで作成されたポピュラーソングも含む）21曲は以下の通り。1909年: *Mamma mia che vo' sapè*. 1910年: *Canta pe' me*. 1911年: *Core 'ngrato*. 1912年: *Tarantella sincera*. 1913年: *Fenesta ca lucive*. 1914年: *Manella mia*. 1915年: *Pecché?, Guardanno 'a luna*. 1916年: *'O sole mio, Tiempo antico, Santa Lucia*. 1917年: *Uocchie celeste*. 1918年: *Maria Mari', Sultanto a te, Povero Pulcinella*. 1919年: *'A vucchella, Addio a Napoli, Tu ca nun chiagne, Senza nisciuno, Scordame*. 1920年: *I' m'arricordo 'e Napule*. cf. Simona (2010), p. 41.
6）Viviani (2010), pp. 150.
7）Alfano (2001), pp. 626–627. https://www.napoligrafia.it/musica/testi/santaLuciaLuntana.htm
8）船中で歌う声を聴いて，その歌がおそらくはカンツォーネ・ナポレターナであることから，ナポリ人だと分かる場面。この曲のメタ・カンツォーネ的な性質を表している。
9）「サンタ・ルチア」は19世紀の有名曲のタイトルにもなっているが，卵城周辺のナポリの海浜地域の名称である。紀元前 6 世紀にナポリを拓いたギリシア人が最初に入植した地域であり，古きナポリのシンボルでもある。
10）サルヴァトーレ・ディ・ジャコモ詩による有名なナポレターナ《マレキアーレ》へのオマージュ。冒頭でナポリ人が歌っているのがこの曲であることを暗示していると思われる。
11）Napoligrafia, https://www.napoligrafia.it/musica/testi/mandulinataEmigrante.htm.
12）都市ナポリを擬人化して，「君」と語り掛けている。
13）ナポリを離れていく船中で，ナポレターナを耳にして，逆にナポリが近づいているような錯覚に陥っている。
14）Frasca (2010), pp. 52–53.
15）セレナータの朝方のヴァリエーションである「マッティナータ」を回想している。
16）Bovio (1993), pp. 239–240.
17）南部イタリアのクリスマスの情景を彩る民族楽器で，バグパイプの一種。
18）イエス生誕の情景を模したジオラマの一種で，「プレセーペ」とも言う。クリスマスが近づくと，南イタリアの家庭では自作のプレセーピオを製作する習慣があった。とりわけナポリでは，18世紀のブルボン時代に，職人たちが芸術的なプレセーピオを競った。サンマルティーノ美術館に展示されている18世紀のプレセーピオコレクションは有名である。
19）七本の剣に胸を刺し貫かれた「悲しみの聖母」のイメージ。
20）語り手である移民がナポリに残してきた小さな娘の名前。
21）Alfano (2001), pp. 44–45. https://www.napoligrafia.it/musica/testi/aCartulinaNapule.htm
22）ナポリの山の手の地域の名称で，戦後に開発が進み高級住宅地となっているが，この歌が作られた頃には，のどかな田園地域であった。
23）ナポリからポッツォーリに向かう途中にある海浜地域。カンツォーネ・ナポレターナの聖域であるピエディグロッタの聖母教会がある。

24）ポジッリポの丘を下ったあたりの海浜地域。ディ・ジャコモの《マレキアーレ》で歌われ，ナポレターナファンたちの巡礼地になっている。
25）*'O ritorno d'America*, edizione Bideri, 1903. 現代は直訳すると「アメリカからの帰還」.
26）アメリカにいる恋人の名前「トゥリッロ」「トーレ」「トトーレ」「トー」は，すべて「サルヴァトーレ Salvatore」の愛称で同じ人物。
27）第一連で語り掛けている「海」のこと。
28）歌詞中に台詞が挿入されたナポレターナは珍しくないが（別れた二人が再開する物語も含めて，ディ・ジャコモの《それは五月》*Era de maggio* が有名），ト書きまでが書き加えられている例はきわめて稀である。カンツォーネ・ナポレターナの演劇的な特徴が表れている貴重な詩である。
29）Alfano (2001), pp. 275–276. https://www.napoligrafia.it/musica/testi/coreNgrato.htm
30）ナポリの海岸線の大通りで，卵城やヴィッラ・コムナーレを経由して，市内からメルジェッリーナまで長く続いている。
31）カンツォーネ・ナポレターナの歌詞には，このように台詞を導入しながら，その中で，今まさに目の前で起こりつつある語り相手の反応を現在形で書き込んでいる（とりわけ三番）例が多くみられる。ナポレターナの詩の演劇的な特徴を表した表現であるといえる。
32）Bovio (1993), pp. 293–295.

使用テクスト

Bovio, Libero (1993), *Poesie e canzoni*, Edizioni Scientifiche Italiane, Napoli.
Viviani, Raffaele (2010), a cura di Antonia Lezza, *Poesie*, Guida, Napoli.
A cura di Alfano, Giovanni (2001), *Napule è 'na canzone. Antologia di canzoni napoletane*, Palladio Editrice, Salerno.
'O ritorno d'America (1903), Edizione Bideri, Napoli.1903.
Napoligrafia, https://www.napoligrafia.it/musica/testi/A.htm,（最終閲覧日2022年 5 月 8 日）

参考文献

AA. VV. (2001), *Storia dell'emigrazione italiana I.Partenze*, Donzelli editore, Roma.
Cossentino, Raffaele (2013), *La Canzone napoletana dalle origini ai nostri giorni*, Rogiosi editore, Napoli.
De Mura, Ettore (1968–69), *Enciclopedia della Canzone napoletana*, Torchio, Napoli.
Durante, Francesco (2013), *Storia e letteratura degli italiani negli Stati Uniti. La scena di Little Italy*, Napoli, Tullio Pironti Editore.
Frasca, Simona (2010), *Birds of Passage. I musicisti napoletani a New York (1895–1940)*, Libreria Musicale Italiana, Lucca.
Gargano, Pietro (2009), *Nuova enciclopedia illustrata della Canzone Napoeltana IV*, Magmata, Napoli.
Grano, Antonio (2004), *Trattato di sociologia della Canzone Classica Napoletana*, Palladino Editore, Campobasso.
Muscio, Giuliana, *Piccole Italie, grandi schermi. Scambi cinematografici tra Italia e Stati Uniti 1895–1945*, Roma, Bulzoni.
Scialò, Pasquale (2017) *Storia della Canzone Napoletana vol. 1*, Vicenza, Neri Pozza Editore.
Sciotti, Antonio (2007), *Gilda Mignonette. Napoli-New York solo andata*, Napoli, Magmata.
Paliotti, Vittorio (1992) *Storia della Canzone Napoletana*, Roma, Newton Compton Editori.
Palomba, Salvatore (2001) *La Canzone Napoletana*, Napoli, L'Ancora del mediterraneo.

北村暁夫（2017），「南米のイタリア移民 ── ブラジルとアルゼンチンを中心に ── 」，『立教大学ラテンアメリカ研究所報No. 46』，pp. 1–13.
ジェイコブズ・リース（2018），千葉喜久枝訳，『向こう半分の人々の暮らし』，創元社.